

中勸助 文學者。
東京帝國大學文科
大學國文學科出
身。

七 五月の日記

中 勸 助

五月四日

昨日から物狂ほしく降りしきつた雨が、からりとあがつた。朝食の後、私は一日一夜を日の目にこがれてゐた鳥の氣持で家を出た。

すつかり夏になつた。熱と蒸氣のみなぎつた空を、崩れ易くはあるが、輪郭のはつきりした雲の塊が、大きく目ざましく耀きながら、ゆつたりと、しかも足ばやに、あちらこちらに、あとからあとからと動いて行く。はてしのない空に、どこからともなく湧起つて、どこへともなく漂つて行

く。恐しい大軍の武者押しを見るやうである。私は海から来る濕氣の多い南風に汗をにじませながら、涼しい蔭を慕つて、川岸の松林を目當に行つた。またもや木蔭の美しく懐かしい季節が來たのである。

川はひどく水嵩が増して、どす赤く滔滔と流れてゐた。その水を迎へる海も、岸に近いところは同じ色に濁つて、川口には水勢と戦ふ波が断えず荒荒しく逆巻き、盛んな飛沫が濛濛と立つてゐる。さえさえしい何時もの水の色よりも、却つて柔かい感じを與へる。

私のある處から一町ばかりの川下の向う岸に、流の急な彎曲のために出來た、犁先みたいな形の洲がある。そこ

に何時になく人が群がつて、打上げられた木屑——それは大抵、水に揉まれて皮の剥げた小枝や、海藻のからである——を集めてゐる。彼等は手拭をかぶつて、くすんだ色の著物を著てゐるが、中には淺黄や赤などのぼつとした色も混つてゐる。熊手で搔くもの、籠に詰めるもの、束にして背負ふもの、天秤でかつぐもの、汀から投網を打つて魚をとるもの、それらを距離といふ不思議な力をもつたものが、そのまま巧な繪にしてゐる。そこには線がきの和畫にのみ見ることの出来る、輕妙のうちに古めかしい落ちつきと上品とがある。

彼等は雨のあがるのを待つて、地中の巢からうようよ

と這出して來た蟲けらのやうに見える。色色な翅をもつた彼等は、蟻みたいにせつせと働き、身に餘る大きな物を持上げて、裸の二本足で、あぶなつかしく、とはいへ決して間違なく、上手に運んで行く。私には、目のあたり見るところの人間といふ物を、これ程な感興と愛憐をもつて眺めたことが度度あつたであらうか。これは全く思ひもかけぬ今日の拾物であつた。

暫くの後、私は空に啼きのこる雲雀の聲をあとに、足もとを見詰めて、その繪を思ひ浮べながら、いそいそとして歸つて來た。

「しづかな流」